

「矯正×デジタル×補綴」

～アライナー矯正から始めるデジタル化 デジタルだからできること、デジタルでも変わらないこと～

日時：令和3年8月1日(日)

場所：京都テルサ、Web 併催

講師：長尾 龍典先生



上原 久晴 (京都府)



令和3年8月1日京都テルサにて第1回関西支部研修会が開催された。講師として京都府で御開業の長尾 龍典先生をお招きし御講演頂いた。

矯正治療を考える上で、どうして矯正治療が必要なのか、何故今のような状態になってしまったのかを考え、MFT や外科矯正やディスクング・咬合調整や補綴治療を駆使して、生物学的な安定性・咬合状態の安定性・修復治療の安定性を得られないと Longevity は望めない。

I Tero とインビザラインを使用する場合でも同様に、原因に対する適切な処置と、明確なゴール設定を行った上で、独自のアライナー素材が着脱し易さと、持続的なライトフォースを与え、デザインされたアタッチメントが、予測実現性の高い歯牙移動を実現する。

長尾先生は IPR のタイミング、臼歯の遠心移動、中心位での咬合採得が大事と説明されていた。

2018年より運用されているインビザライン GO では、小白歯から小白歯までが移動可能範囲で、小白歯間のアーチ拡大可能量が4mm 以内。改善可能なディスクレパンシー量が7mm 以内、改善可能なバイト幅が片顎2.5mm ずつ、正中の移動可能量が

1mm まで。臼歯関係の改善はできないという制約があり、ケースアセスメントというソフトで AI が難易度判定をしてくれるため、GP にとっての矯正の入り口となり得る。また補綴を絡めることでシンプルな矯正治療が可能となると説明されていた。

デジタルを用いることで、規格化・簡略化を可能にし、コミュニケーションが変わり、データ管理が飛躍的に向上するとの事だった。

今回、参集と Web のハイブリッド形式で開催されたため、会場と全国の Web 参加者から多くの質問があがり、関心の高さがうかがえた。

昼休みを利用し、二名の会員発表も行われた。北坂 卓也先生による「下顎に bone anchored bridge を行った1症例」として、60代の歯科恐怖症の患者に今後 IOD へと変更可能な bone anchored bridge を作製した7年経過症例を発表された。

上原 久晴先生による「上顎前歯部にインプラント治療を行った一症例」として、前歯部抜歯即時インプラントの妊娠期のトラブル症例を発表された。